208

二〇二〇年度　入学試験問題

法学部A方式Ⅰ日程・文学部A方式Ⅱ日程・経営学部A方式Ⅱ日程

二限　国　語　（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

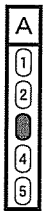
四　問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

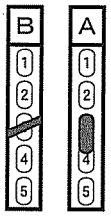
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はＨＢの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

(一)　正しいマークの例



(二)　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

ファーストフード全盛に見える現代アメリカ。だが、価格や利便性とは違った価値を食に求める動きは、着実にその裾野を農業にまで広げている。ファーストフードビジネスの健康面への対応の甘さをきっかけとして、格差社会とファーストフードが分かちがたく結びついてしまったことの弊害が強く意識されるようになった。食糧供給を工業モデル的な市場万能主義の弊害から守り、環境と生活を守るための基本的権利として捉え直そうとする潮流は明らかに強まってきている。食べ物をめぐって、その健康への影響や正義や権利といった法的な概念がこれだけ強く意識されるようになったのは、ヒッピー*たちの食文化革命の精神を除けば、食肉工場の実態に端を発した食品規制が実現したあの二〇世紀初頭の規制と改革の時代以来といっても過言ではない。

食からアメリカ社会を変革するというヒッピーたちの抱いた夢は、一度は跳ね返され、格差社会の到来でハードルもさらに高くなったかに見えるが、実は今世紀に入って、これに再挑戦するためのカードはそろいつつある。一〇〇年前には黎明期にすぎなかった映画というメディアが、人々の問題意識のケイハツ(A)に利用できる時代になった。個性的な味を模索する動きは、フランチャイズ化された大量生産とは異なるフードビジネスのモデルを生み出してきている。ヒッピーたちが実践しようとして挫折した有機農業を地域住民が支えるＣＳＡ*のシステムや、地域住民自らが有機農業に参加する動きも出てきた。そして、それは、格差社会の分断されたコミュニティの再生をも視野に収めつつある。農業の再構築と食糧供給の刷新によってファーストフード帝国にメスを入れられる可能性は、高まっているのだ。(1)

これがヒッピーたちの食文化革命の二の舞にならないためには、どのような戦略が必要だろうか。アメリカで広まりつつある食に対する新たな思考様式が、ファーストフード業界と格差社会の双方に対抗していくためには、自らの理念をさらに明確にする必要がある。

ＣＳＡが農業を工業モデルから守ろうとしているのは明らかだが、なぜそうすべきか、より説得力のある論理を構築するこ

とが望ましい。それに有効なのは、トータルなコストという観点を持ち出すことだ。

ファーストフード業界が求めるような農業生産のあり方は、食べ物そのものの価格を下げる点ではコストダウンかもしれないが、代わりに土地の荒廃や健康被害のコストが上昇するのは恐らく避けられない。ラージ・パテル*によれば、環境や生態系への影響までコストに含めれば、四ドルのハンバーガーの価格は、実際には二〇〇ドルになるという。将来にわたって社会が負担せねばならないコストやリスクと比較して、どちらが得かを考える議論にもっと社会全体を引きずり込むべきだろう。

やせてしまった土地を回復させるためには、数年から数十年という期間が必要になる。仮に食糧不足を輸入で補うにしても、それは、アメリカから富が海外に流出することを意味し、貿易におけるアメリカの地位は低下しかねない。先端技術でいくら稼いでも、それが食糧の輸入で消えていくといった構図になりかねない。

また、現在でもアメリカでは、成人の四割が肥満とされる。このまま行けばいずれ将来は国民の半分がＢＭＩ*25を超えてしまい、生活習慣病の大きなリスクに伴う医療費の増大が恐らく深刻な問題になる。仮にアメリカが貧弱な公的医療保険制度を本格的に拡充するなら、そのコストは社会全体で抱え込まねばならなくなる。医療費は自己負担という従来の方針にしがみつくとなれば、貧困層はもとより、所得層中位の人までもが医療費で破産するか命を落とすことになろう。バクダイ[B]な時間と労力をかけて育成してきた社会の人的資源そのものを、アメリカはみすみす失っていくリスクを抱え込みつつある。[2]安い食べ物を作るより、安全な農業と食育に力を入れた方が安上がりなのだ。

このように食べ物をめぐるトータルなコストという観点をもっと打ち出すことで、食からアメリカを変革するという動きには弾みがつく可能性がある。実はこうした戦略は、かつての規制と改革の時代にも見られたものだ。女性たちの禁酒運動は、食習慣をトータルに考えるという発想に根差し、食品に対する安全意識の向上に貢献した。トータルに考えるという発想の持つ社会変革への効果は、十分計算できるはずなのである。

[X]、かつての食の問題をトータルに考えるという考え方は、効率優先のファーストフードの台頭を防ぐことは出来なかった。その見地からすれば、コストをトータルに考えるだけでなく、その負担のあり方という点にも人々の関心を惹きつ

けるべきだろう。

ファーストフードビジネスを支えている現在の市場万能主義的な食糧生産や流通のあり方は、社会のあちこちで犠牲者を生む形で成り立っている側面がある。農家は下請け工場のような弱い立場に置かれ、スーパーマーケットが撤退した貧困地区の住民は低賃金のファーストフードを働き口として、また食糧源として依存せざるをえず、結果的にこれが格差社会を強化し、貧困層の肥満の増大という悪循環を生んでいる。巨大な資本が一元的に食糧を支配するような現在の構図は、人々の富がそこに吸い上げられてしまうだけでなく、[3]巨大な利益を得る側と搾取される側との間の不公平感を助長している。

その点、CSAは、食糧自給率を高めることで外部資本に支配されにくいコンパクトな経済圏を住民自らが作り、それを公平に負担して行くという風土を持っている。トータルなコストを考えるだけでなく、その負担のあり方も公平にしようという考え方をもっと打ち出せれば、深刻な格差社会に苦しむ人々からの共感はより得られやすくなるだろう。

トータルなコストと公平な負担という観点は、ともに効率優先の営利第一主義とは一線を画すものだ。これは、食べ物という生存上欠かせないものにまで工業生産のような競争的市場主義を持ち込むべきではないという考え方に通ずる。つまり、食べ物を収益性という観点から生産するのではなく、命を保証するものとして考える発想への転換を可能にする。

こうした考え方には、なぜ食糧をビジネスの対象としてはいけないのかという反論がありうる。しかし、これに対しては、生活のあらゆる領域を私たちは競争原理に委ねているわけではないという観点をもっと打ち出すことで対抗可能だ。

例えば、教育が挙げられる。ビジネスの論理からすれば、横並びの公立学校という制度自体が競争のソガイ因子である。より成果を上げる教員に高い給料を出すとなると、有能な教員を雇える財政基盤のある学校が経営難の学校を買収し、いわば学校のフランチャイズ化が起こるだろう。その一方で、財政基盤の弱い学校は淘汰されていき、通える範囲に学校がないという子どもたちも出てくることが考えられる。でも、現実には、ここまで極端なことは起きてはいない。それは、一定の質を保証された公教育サービスを張り巡らせ、競争による教育格差の拡大に一定の歯止めをかける方が大事だと人々が考えている証拠だ。

Y 、ビジネスの論理からすれば、教育は例外分野なのだ。だとすれば、そのような例外分野として食も認めるというのは筋違いとは言い切れない。子どもの人数の増減にかかわらず、一定の公教育サービスを、いわばコストを度外視して税金で維持することが大事であるのなら、同様にＣＳＡを捉えることも可能だ。地域住民に安全な食糧へのアクセスを保障するＣＳＡのような制度の導入は、基本的な生活の権利を保障するという観点からすれば、公立学校と同じように位置づけられるはずだ。

食から社会を変革しようとする新たな動きは、トータルなコストとその公平な負担という議論と接点を持っているだけでなく、競争的市場万能主義の限界を人々に再認識させる契機を含んでいる。そしてそれは、効率を優先し企業が私的利益を追求することで深刻化した格差社会に代わって、効率よりも安全が保障された暮らし、私企業の利益よりも地域社会が利益を公平に享受する社会という、オルタナティブな社会モデルを提示できる可能性を秘めている。それは、格差社会を生んだ資本主義の貪欲なまでの効率優先・収益優先の価値観に代わって、私益よりも公益に回帰しようとする流れを生み出しつつあるといえる。

（鈴木透『食の実験場アメリカ――ファーストフード帝国のゆくえ』より）

【注】 ＊ヒッピー　一九六〇年代後半のアメリカ合衆国に現われた、既成の価値観や既存の社会体制を否定する人々。またその運動。七〇年代には、農薬や化学肥料を使わない有機農業も行った。

＊ＣＳＡ　地域経済振興や地産地消を試みる、地域支援型農業(Community Supported Agriculture)。

＊ラージ・パテル　イギリス生まれの著述家（一九七二～）。アメリカの食糧問題研究家としても知られる。

＊ＢＭＩ　ボディマス指数(Body Mass Index)。体重と身長の関係から、人間の肥満度を示す。

問一　傍線部1「ファーストフード帝国にメスを入れられる可能性は、高まっている」とあるが、その理由として適切なものをつぎの中から**二つ選び**、解答欄の記号をマークせよ。

ア　食からアメリカ社会を変えたいというヒッピーたちの夢が、いまも強く生きつづけているから。
イ　有機農業が地域の住民に支えられたり、住民たちが自ら参加したりするものに変化してきたから。
ウ　食をめぐる正義や権利を政治的に主張する必要性が、初めて人々に強く意識されるようになったから。
エ　映画というメディアが大きく成長し、ヒッピーたちが人々の意識を容易に変えられる時代になったから。
オ　健康への影響から、ファーストフードと格差社会の結びつきの問題が認識されるようになったから。
カ　個性的な味を求める人々に応えられる、新しい大量生産のフードビジネスが生まれてきているから。

問二　傍線部2「安い食べ物を作るより、安全な農業と食育に力を入れた方が安上がりなのだ」とあるが、なぜそう言えるのか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　ファーストフードが安いのは、環境や生態系に影響をあたえて農産物を大量に生産しているせいであり、いずれ健康被害が起きて農業労働力が不足したときには、海外から高い食糧を輸入しなくてはならないから。
イ　土地を疲弊させることがない地域支援型農業は、食糧不足を引き起こして輸入を増大させることもなく、また肥満も未然に防ぐことができるので、長期的な視点では社会の人的資源を維持するために安上がりだから。
ウ　アメリカで成人の四割に肥満をもたらしているファーストフードは価格は安いかもしれないが、肥満のせいで消費量が増大して食費は高くなり、一方で有機農業に従事する健康な成人の方が食費は安いと考えられるから。
エ　ファーストフード店が提供する食べ物はその生産のために土地を疲弊させ、また健康被害から医療費増大まで引き起こすので、社会全体で負担するコストは、地域に根差した農業の生産物を健康的に食べる方が小さくなるから。
オ　公的医療保険制度が貧弱なアメリカでは、ファーストフードを食べることで引き起こされる生活習慣病の治療費がきわめて高額であり、そのコストまで含めて考えるとファーストフードは安い食べ物とは言えないから。

問三　傍線部3「巨大な利益を得る側と搾取される側との間の不公平感を助長している」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　巨大資本同士の対決として、貧困地域でファーストフード店がスーパーマーケットを駆逐していくような状況は、格差や貧困に苦しんでいる人々にどうにもならない無力感をあたえているということ。

イ　ファーストフードビジネスの利益を支える農家や労働者は、収入源や食糧源としてファーストフードビジネスに依存する貧困層でもあり、そこに格差や貧困をさらに拡大していく仕組みがあるということ。

ウ　地域支援型農業を行っている地域では、住民の負担で巨大資本に支配されにくい経済圏を生み出すことができるが、その余裕がない貧困地域の住民は、そのことに対して不公平感を覚えているということ。

エ　巨大な利益を上げるファーストフードビジネスによって、生産者である農家が安定した取引先を手に入れる一方で、労働者は低賃金で働かされており、社会的に不公平な労働環境が生まれているということ。

オ　ファーストフードビジネスのような巨大資本が、食べ物の供給やそれに関する仕事をすべて支配している状況では、だれもが食を通じて巨大資本に利益を搾り取られる存在になってしまうということ。

問四　本文中の空欄 X ・ Y に入る語句として、最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。ただし、同じ記号をくり返し選んでもかまわない。

ア　そして　　イ　なぜなら　　ウ　だが　　エ　例えば　　オ　つまり　　カ　一方で

問五　波線部「食に対する新たな思考様式が、ファーストフード業界と格差社会の双方に対抗していくためには、自らの理念をさらに明確にする必要がある」とあるが、筆者はどうすればその「自らの理念」が明確になると考えているか。本文全体の内容を踏まえて四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問六　二重傍線部A～Cのカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

「正調」という言葉がある。民謡で《正調安来節》、《正調佐渡おけさ》などと言うときの、あの「正調」である。一般的には、地元でずっと歌い継がれてきた「本来」の歌い方というような意味で理解される。実際、有名な民謡の地元に行くと「正調〇〇節保存会」というような名の保存団体があり、そこでは元のままの手を加えられていない「本物」が聴けると思うのがごく普通の感覚だろう。

だが、この「正調」、意外に厄介な存在である。各地に保存団体ができるなど、「正調」の存在が確立されるのは大正期前後のことだが、①その時期の「正調」の説明はだいぶ様子が違うのである。

兎角世の中の事は何でも人工を加へて自然から遠ざからうとしてゐる、……そう云ふ追分も自然調から段々型に嵌つて行つて、正調追分が現在幅を利かしてゐる。……然し追分の正調と云ふのも、之は海の上から山の中から堀出したものを精練して、つまり都人士にもやれる様にしたもので、……浪の音を聞きながら、又馬の手綱をとつて唄ふ訳にも行かず、*あつしをぬいで、*脚絆をとつて、東京の真中で唄へるものにしたのである……。（藤田鈴朗「追分の研究：尺八との間柄」、『三曲』一九二六年七月号）

もともと自然のなかで歌われていたものに手を加えて洗練し、都会人にも歌えるようにしたのが「正調」だというのだから、今われわれが考えているのとはほとんど逆と言ってもよい。

少し後のものだが、一九三九（昭和一四）年に出た三木如峰の「北海道俚謡正調追分節」という本を見てみると、「正調」は「古調」と対比されている。古くから地元で歌われてきた［X］は、「歴史的な面白味や郷土的色彩」はあっても「卑俗雑駁な感じを免れぬ」のに比して、［Y］の方は「すべての点に於いて組織的で如何なる場所、如何なる人士の前に於いて之を唄っ

ても決して辱しからざる整った型式を備え、豊かな芸術味と高尚さをもっている」と書かれている。

このふたつの文献、書かれた時期も「正調」に対する評価もだいぶ違うが、「正調」が、都会人にも共有してもらえるような洗練された形式に整えられることである種の普遍性を獲得しているという認識では完全に一致している。そしてそのような認識が、正調こそが「本来」的なあり方を示すものであり、芸術的な価値をもつものであるという考え方を支えているのである。

民謡の「本来」のあり方というと、歴史的な保存や復元と反射的に考えてしまう現代人は、作りかえられ、洗練されたものの方が「本来」だという考え方には違和感をもつかもしれないのだが、この時期にはむしろそちらの方が普通だった。東洋音楽学会の創設者である田辺尚雄(一八八三―一九八四)は、アカデミックな日本音楽史研究のパイオニアである一方で、「玲琴」なる新楽器を考案したりもしているが、一九三〇(昭和五)年には、田辺自身がこの新楽器で伴奏したレコードが《正調追分》を銘打って出されている。従来行われてきた三味線の伴奏は深みが不足しており、この楽器でそれを補ってこそ高い芸術性をもつ「本来」の追分節になるというのが田辺の言い分であった。

追分節の［　Z　］で一番問題になったのは、囃子の存在であった。たしかに古い録音には、「その声聞かして二十日病ませる、病ませて死んでは、お医者が貧乏で、お寺が繁盛だ、スイスイ」などという、本唄とはおよそ関係のない囃子がつけられているものなどもあるのだが、それが「卑俗」の最大の要因とされ、真っ先に取り除かれた。ちなみに、今日「正調」の上演で聴かれる「ソイ掛け」と呼ばれる掛け声は、この囃子の「スイスイ」の「改良版」である。テイストは似ても似つかぬほどに違っているが、②それがまさに「芸術化」されたという所以なのだろう。いずれにせよ、三味線や囃子といった座敷唄的な卑俗な要素を消し去ろうとする大正期前後のこうした動きのなかには、そのようなものを逃れて地方に残る日本の「本来」の文化を求めてゆこうとするベクトルと、そこにさらに都会人にも通じる普遍性を付与してゆこうとするベクトルとが、微妙なバランスを示しつつ混在していた。「正調」は、まさにそのようなあり方を一身に引き受ける概念だった。

この「正調」という概念が、とりわけ民謡と結びつく形で用いられるようになったもうひとつの背景がある。『萬朝報』の主宰者であった黒岩涙香が一九〇四(明治三七)年にはじめた「俚謡正調」という読者からの募集企画である。「俚謡」という語は今日

ではあまり使われないが、第二次大戦前には今日「民謡」と呼ばれるものを指す語としてむしろ普通に使われていたものであり、その意味では大正期の民謡の「正調化」の動きの先鞭をつける役割を果たしたとみるのは不自然ではない。

ただし、この「俚謡正調」で念頭に置かれている「俚謡」は音楽ではなく、七七七五という、民謡で一般的に使われる詩型の方である。この詩型はもともと、和歌(五七五七七)、俳句(五七五)とならぶ日本の三大詩型の一つであり、大和民族の心意気をうたうのに最も適するとされていたが、近年ではすっかり堕落して卑俗な都々逸*などに成り下がってしまった、そこで読者に広く呼びかけて新作を募集し、その本来の精神を取り戻したい、というのが、この「正調」という語にこめられた目論見であった。一九〇四年という時期を考えると、③そこには国粋主義の台頭した日露戦争下の状況が影を落としていたことは間違いない。最初の入選作は「戟を枕に露営の夢を心ないぞや玉あられ」というものだが、選評には「之を一吟すれば満州に野営する勇士の風貌、眼前に浮ぶが如きを覚ゆ」と書かれ、近来の都々逸にはみることのできなかった「調の高き」あり方が激賞されている。

もちろん俚謡と言っても、ここで募集されているのは詩だけで、音楽の方はあまり問題になっていないから、これがその後の各地の保存会結成の動きにみられる「正調」のあり方にただちに直結したとは言い難い。だが、涙香の下でこの「俚謡正調」の企画に深く関わっていた湯朝竹山人という人物がその後、民謡研究の中心的な担い手の一人となり、全国の民謡の歌詞集を編纂したり、追分節などについても多くの同時代証言を書き残したりした事実を考えるならば、各地の「正調」保存会が目指した方向性に、この「俚謡正調」の余韻を聴き取ることはさほど難しくない。

民謡の価値が見出され、その「正しい」形を保存しようとする志向が確立されたという点では、たしかに大正期は民謡をめぐる現在に至る動きの原型が形作られた時代だったと考えて間違いないだろう。しかし他方で、そこで想定されていた「正しい」形のあり方は、今のわれわれが民謡に向ける視線とは明らかに異質な方向性をもっていた。「俚謡正調」のもたらした国粋主義的な余韻がやがてエスカレートし、俚謡による「精神作興」をめざした《江差追分》の改良文句集などというものを生み出したり、「一人息子は空飛ぶ勇士」などという軍国主義バリバリの歌詞に生まれ変わったりといった問題を生じさせるようになっていったことを考えるならば、「正調」のこうしたあり方が大きな危険を懐胎していたことは否定すべくもない。その意味では、戦後

になってそれに対する反省から、このような方向性が否定的に取り上げられるようになったことは歴史の必然であったと言うべきであるのかもしれない。しかし他方で、民謡という資源を新たな時代に合った形で生かしてゆくことを是とするこのような考え方の中に、④今やわれわれが疑うこともない、ある種冷凍パック的な「保存」の概念の中で見失われてしまった様々な展開の可能性が残されていたのかもしれないという思いを捨てることができないこともまた事実なのである。

（渡辺裕「正調」より）

【注】 ＊あつし　非常にじょうぶな厚手の木綿織物。労働着。
＊脚絆　旅行や作業などの時に、すねにまとい、足を保護して動きやすくする布。
＊『萬朝報』　一八九二年に創刊された、東京の日刊新聞。
＊都々逸　主に男女相愛の情を、口語を用いて七七七五の形で歌った俗曲の一つ。

問一　傍線部①「その時期の「正調」の説明はだいぶ様子が違うのである」ということを示すために、続けて文章が引用されている。そこから読みとれる内容として**誤っているもの**をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　海の上、山の中で歌われてきたものは、そのままでは「正調」と言えない。
イ　大正期前後には、ある程度整理された「正調」が好まれていた。
ウ　昔ながらの追分が歌われることこそ、「正調」のあるべき姿だ。
エ　人工的なものが何でも好まれる時代であり、「正調」もまた人工的であった。
オ　労働者たちが歌う歌を都会の紳士にも歌えるようにしたものが「正調」である。

問二　本文中の空欄 X Y Z には「正調」または「古調」のいずれかが入る。その組み合わせとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　X：「正調」　Y：「古調」　Z：「正調」
イ　X：「古調」　Y：「正調」　Z：「正調」
ウ　X：「正調」　Y：「古調」　Z：「古調」
エ　X：「古調」　Y：「正調」　Z：「古調」
オ　X：「正調」　Y：「正調」　Z：「古調」
カ　X：「古調」　Y：「古調」　Z：「正調」

問三　傍線部②「それがまさに「芸術化」されたという所以なのだろう」とあるが、「芸術化」されたということの説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　自然発生的に生じてきたものの味わいが大きく変更され、本来のものにはない文学性が獲得されたということ。
イ　自然発生的に歌われてきたものが形式を整えられ、どのような人々にも通用するように洗練されたということ。
ウ　自然発生的に生じてきたものが芸術として認められることで、形式にとらわれない新しさが加えられたということ。
エ　自然発生的に歌われてきたものが、近代化の流れから全くの別物の西洋近代的な音楽へと作り直されたということ。
オ　自然発生的に歌われてきたものの中に、変わることのない普遍的な音楽性を人々が発見したということ。

問四　傍線部③「そこには国粋主義の台頭した日露戦争下の状況が影を落としていたことは間違いない」とあるが、その結果どのような状況が到来したか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　従来は和歌や俳句と同様に広まっていた七七七五の詩型が、戦争によって国家と個人の対立を表す歌として再び流行していった。

イ　従来は個人の生活や恋愛など卑俗な題材を歌っていた七七七五の詩型が、戦場で国家に奉仕する様子も歌うものになった。

ウ　本来は個人的な恋愛感情を歌うための七七七五の詩型が、戦地での国境を越えた新しい人間的な交流を歌うものに変化した。

エ　本来は卑俗な民謡で使われる七七七五の詩型が、格調の高い民族的な歌となり、日本を代表する三大詩型として認められた。

オ　従来は民族の心意気を歌うためのものだった七七七五の詩型が、堕落して卑俗な都々逸のような歌に成り下がってしまった。

問五　この文章を通じて筆者が述べている「正調」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　「正調」とは、各地方に目が向けられ、中央と文化が共有された大正期前後に作り出された、人工的な概念である。

イ　「正調」とは、大正期に都会から地方が再発見され、民謡に注目が集まったことで生まれた前近代的な概念である。

ウ　「正調」とは、異なる地域で歌われる民謡同士を比べて、全ての民謡の元となった歌を発見しようとした運動である。

エ　「正調」とは、「精神作興」をめざした軍国主義と強く結びつき、その反省からかつては危険視された価値観である。

オ　「正調」とは、都と地方、貴族と平民を問わず『万葉集』以来続いてきた日本人らしい歌い方を代表する考えである。

問六　傍線部④「今やわれわれが疑うこともない、ある種冷凍パック的な「保存」の概念」とはどういうものか。比喩の内容を明らかにして三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

〔三〕 つぎのA・B二つの文章を読んで、後の問いに答えよ。

A 昔、三井寺*、山門*のために焼き払はれて、堂塔・僧坊・仏像・経巻、残る所無し。寺僧も山野に交はり、人も無き寺に成りにけり。寺僧の中に一人、新羅明神*へ詣でて、通夜*したりける夢に、明神、御戸を開きて、1よに御心地よげに見え給ひければ、夢の中に思はずに覚えて、「『我が寺の仏法を守らむ』a と誓ひあるに、かく失せ果てぬる事、b いかばかり御歎c きも深からん①と思ひ給ふd に、その御気色無き事、いかに」と申しければ、「誠にいかでか歎き思しめさざらむ。されども、この事によつて、真実の菩提心を発せる寺僧一人ある事の悦ばしきなり。堂・塔・仏・経は、財宝あらば作りぬ②べし。菩提心を発す人は、千万人の中にも X こそ」と仰せられけると見て、かの僧も発心して侍りけりとこそ申し伝へけれ。

B 東塔*の北谷にありける僧、余りに貧しき事を歎き思ひて、日吉*へ百日参詣して祈り申しけるに、「2相計らふべし」と仰せある示現を蒙りて、悦び思ひてすごす程に、聊かの事によりて、年来の房主に追ひ出されて、寄る方も無かりけるままに、西塔の南谷なる房に同宿しけり。示現蒙りて後は、物を待つ心地にてありけるに、させる事無きのみにあらず、房主にも追ひ出されぬ。面目も無く覚えて、また参籠して祈請申す程に、示現に蒙りけるは、「先業*拙くして、いかにも福分なき故に、東塔の北谷は寒き房なれば、西塔の南谷は暖かなる房なれば、遣りたるなり③。これこそ『小袖一つの恩』と思ひ計らひたるなり。この外の福分、我が力の及ぶべき④にあらず」と示し給ひける後は、思ひ切りて祈り申さず。

（『沙石集』より）

【注】

*三井寺　滋賀県大津市にある天台宗の大寺院。正式には園城寺（おんじょうじ）といい、略して「寺（てら）」「寺門（じもん）」、その僧を「寺僧（じそう）」といった。

*山門　大津市と京都市にまたがる比叡山にある延暦寺のこと。天台宗の総本山。三井寺と長年、抗争関係にあった。

*新羅明神　三井寺の守護神。

*通夜　寺社に籠って一晩中祈願すること。

*東塔　比叡山の区域の名称。比叡山は東塔・西塔・横川（よかわ）の三つの区域から構成された。

*日吉　比叡山麓にあった日吉（ひえ）大社のこと。比叡山を守護する日吉山王権現が祀られている。

*先業　前世で行った善悪のふるまい。

問一　二重傍線部①「ん」②「ぬ」③「なり」④「べき」の文法上の意味として、最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　意志　　イ　打消　　ウ　可能　　エ　強意　　オ　原因推量

カ　現在推量　　キ　推量　　ク　断定　　ケ　伝聞

問二　傍線部a「守らむ」b「失せ果てぬる」c「御歎き」d「思ひ給ふ」の各語が示す行為の主体として、最も適切な組み合わせをア～カの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　a この話の主人公に当たる僧　b 三井寺　c 新羅明神　d 新羅明神
イ　a この話の主人公に当たる僧　b 三井寺　c 三井寺　d この話の主人公に当たる僧
ウ　a この話の主人公に当たる僧　b 三井寺の僧たち　c 三井寺　d この話の主人公に当たる僧
エ　a 新羅明神　b 三井寺の僧たち　c 新羅明神　d 新羅明神
オ　a 新羅明神　b 三井寺　c 三井寺の僧たち　d 新羅明神
カ　a 新羅明神　b 三井寺　c 新羅明神　d この話の主人公に当たる僧

問三　空欄 X に入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　あいなく　イ　ありがたく　ウ　うるはしく　エ　えうなく　オ　くちをしく

問四　傍線部1「よに御心地よげに見え給ひければ」とあるが、その理由を説明したものとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　三井寺が焼け失せたことによって、寺院の再建に向けて多くの僧たちが心を一つにする環境が整ったから。
イ　三井寺が焼け失せたことによって、多くの寺僧が世の中の無常を悟り、極楽往生を求める心が強まったから。
ウ　三井寺が焼け失せたことによって、この僧が何事にもとらわれず、仏道に専心できる状態になったから。
エ　三井寺が焼け失せたことによって、この僧が仏道を追求する心を一層深め、三井寺の再興を心に誓ったから。
オ　三井寺が焼け失せたことによって、この僧が新羅明神への信仰心を深め、明神に三井寺の守護を強く願ったから。

問五　傍線部2「相計らふべし」とあるが、神は僧に対してどのような措置をとったか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　東塔北谷の簡素な住坊を追い出されたときに、これを哀れみ、西塔南谷の豊かな住坊の坊主となる栄誉を与えた。

イ　長年住み慣れた東塔北谷の住坊が寒かったため、小袖を贈るとともに、暖かな西塔南谷の住坊に住まわせてやった。

ウ　前世での所業がよくなかったために現世で福分の乏しいことを、小袖一枚を贈ることで気付かせてやった。

エ　長年住み慣れた寒い住坊を坊主に追い出されるかたちをとって、暖かな別の住坊へ移り住むという恩恵を施した。

オ　何も与えないことで、前世での仏道修行が不足していることを伝え、修行に専念することの大切さを気付かせてやった。

問六　右のA・B二つの文章は『沙石集』のうち、同一章段内に連続して配置されており、編者はこの二話を共通する教えを伝える説話として認識していたことがうかがえるが、その教えとはどのようなものか。二十字以上、三十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問七　『沙石集』と同じ時代に成立した作品をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　閑吟集　　イ　太平記　　ウ　古今著聞集　　エ　今昔物語集　　オ　日本霊異記